

絵本との出会いが人の心を豊かにすると信じて――

山梨大学教授として、ドイツ文学を研究してきた八木さん。退職してからは古里に戻り、縁あって大人向けの読み聞かせを始めました。活動では、地域の人に絵本の素晴らしさを知ってもらおうと、楽しく和やかなひとときを創っています。

【文学への飽くなき探究心】

八木さんは、高校時代にドイツ詩人の作品に触れ、ドイツ文学を研究したいと思うようになったと話します。

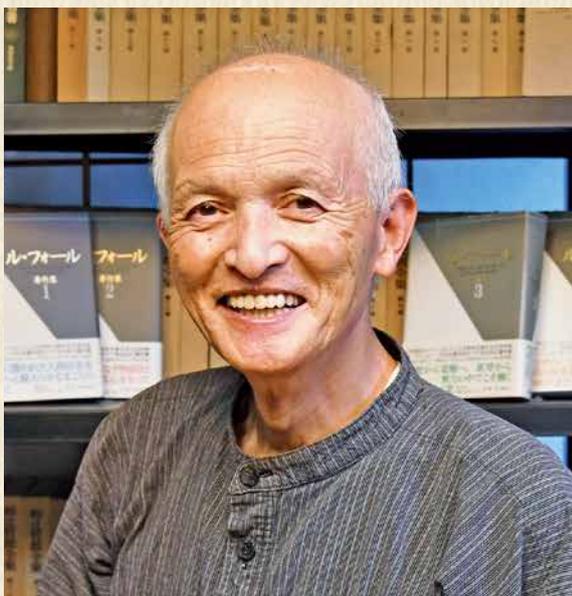
「教師から、フリードリッヒ・ヘルダーリンの詩集を勧められました。すっかりその世界観の虜とらになってしまい、自分の学まなぶべきものはこれしかない」と、ドイツ文学の研究を志すようになりました。大学2校で学びを深め、大学院でさらに研究を重ね、



30歳の時に山梨大学で講師を勤めるように。その後、その20年後、教育系の教授

となり、以降は複数の大学教授と共に、20世紀のドイツ・カトリック文学を代表する作家、ゲルトルート・フォン・ル・フォールの作品の研究と著作集の翻訳に、携わることができました

出身の児童文学作家ミラ・ローベと偶然出会いました。その日は、4月2日『アンデルセンの日』として宮殿が開放され、子どもたちがたくさん児童文学書を自由に読める日です。わくわくと目を輝か



大人のための絵本の会 主宰者  
八木博やぎひろしさん(横井二丁目)

【絵本に可能性を見出す】  
八木さんは、海外で出会った絵本作家が、今の読み聞かせ活動のきっかけを与えてくれたと、振り返ります。  
「30年以上前にオーストリアで研究していた頃、ドイツ

せる子どもたちに囲まれながら、彼女は自著『リンゴの木』を読み聞かせていました。私はその優しい朗読と温かな作品に感銘を受け、日本の子どもたちにも読んでもらいたいと思いました。その後、出版

社と交渉を重ね、国内での出版が実現。いつか、私も絵本の読み聞かせをしたいと考えようになりました」

【楽しい時間はみんなで共有】  
「5年ほど前から、地元の人や宮川町内のラジオ体操仲間の協力もあり、毎月第一水曜日に宮川町公会堂で、大人に読み聞かせる機会に恵まれました。こだわりは、プロジェクターで大きく映し出した絵本を、地域の皆さんと共にゆつくりと味わうこと。人生の後半、再び絵本にふれて楽しむことは、大人にとって『生きる上で本当に大切なものは何かを考える時間』として、必要なことだと思っています。それは、自己を見つめ直す機会にもなるのではないのでしょうか。今は、コロナ禍のためお休み中ですが、収束したら再開する予定です。このまちの人々が、ここに住んでいて良かったと振り返られるよう、自分にできることを続けていきたいです」

八木さんはこれからも、心豊かな絵本の世界を通して、地域の輪を広げていきます。



八木さんの読み聞かせに耳を傾ける参加者

Shimadajin File #126

Story 島田人